

闘う身体：人を着ているとは言えないだろうか

兵庫県立大学准教授 小野原教子

BODY COMBAT: COULD IT BE SAID THAT WE WEAR HUMANS?

Noriko ONOHARA, Associate Professor, University of Hyogo

Human beings are animals, animals wearing clothes. Covering or decoration of bodies is a phenomenon that can be seen in other animals, but it is said that the concept of shame (sense of shamefulness) is a phenomenon specific to humankind. As societies develop, clothes arise within them as symbols and fashion. Furthermore, as a higher-order phenomenon clothes become a subject of fetishism.

Why do people wear clothes? When we ask ourselves this deep and fundamental question, we have to face another question: where is the border between animals and human beings? In this essay articles recently created by young innovators in Europe are introduced and answers are sought to these questions. Deviant experiences of moving across borders between animals and mankind are shared, and the framework of problems related to wearing clothes is considered.

人間はまぎれもなく動物だが、衣服を着る動物である。身体保護、装飾は、他の動物とも共有できる要素だが、恥の概念（羞恥心）は人間の特徴だと言われる。社会が発展すると、記号としての衣服、またファッション現象が生まれ、さらに高次に現象してフェティッシュな対象としての衣服が立ち現れる。我々が他の動物と我々を分かちるのは我々の精神活動のなせる技であり、その技を技とするのもまた我々人間である。

人はなぜ服を着るのか？この根源的にして深遠な問いをおもうとき、動物と人間の境はどこにあるのかという問いにも直面せずにはいられない。本稿では、ごく最近のヨーロッパの若い作家たちの作品を紹介しながら、あらためてその問題に迫ってみたい。動物と人間の境を行き来する懐かしいような逸脱したような体験の共有と、衣服を着ることについての問題の枠組みを提供できればと考える。

まずスウェーデンの女性作家サラ・クレップ Sarah Kläpp のコミック作品の紹介から始めたい。『閉ざされた部屋 The Shut Room』（2010）と題された8頁の作品は「どこからどこまでがわたしたちの体なのか」、そして服の在り処を問わずにはいられない奇妙なユーモアに貫かれている。台詞がないのも特徴であり、コミックと呼んで良いのかも疑問である。

ガスマスクが壁に掛けられた部屋のゆがんだ描写から始まるこの作品は、指、コルセツ

ト、足、脚、ドロワーズ、つまり身体＝人の体の細部へとクローズアップされていく。その動作は脱いでいるのか着ているのか、描かれているのは体なのか服なのか、判然とせず、眺めるもの／読むものを「不安」にさせる。ロラン・バルトは、著書『モードの体系』についてのインタビューの中で、「記号はそもそも言語から完全に独立できるものなのか」と問われた際に、言葉のない映像が持つ意味の多義性を「不安 anxiety」と述べた（註 1）。いわば意味を奪われた体は行き先が定まらないままモノクロ・ページの上でうつろにたゆたう無声の記号である。

人がベッドの上で抱き合っている（Fig. 1）。二人の人＝四本の足が絡まり濃い体毛を持つ二本の足とつるんとした真っ白な脚とが対照的に描かれる。男性的な下半身から延びる継ぎ目のない上半身は裸かと思いきや、それは女性らしい衣装に覆われた「身体」＝人の体であった。そして仕事を終えた後の着ぐるみのようにその体は脱ぎ捨てられ、気だるくハンガーに吊るされるモノとなる（Fig. 2）。

抱きしめていたのは誰なのか。抱きしめられていたのは誰なのか。抱きしめあっていたのではなかったか。情事後、壁に掛けられた「体」に向かい、ふと手を伸ばしてみる。あなたなのか、わたしなのか。あなたの体なのか、わたしの体なのか。どちらの服なのか。身に着けるときわたしは一人である。目の前にぶら下がる体を身に着けて、バックボタン、ガーターベルト、ガスマスクを装着してドレスアップが完了する。彼女（彼？）は一人であり、裸体は衣装だった。男を着るか、女を着るか、部屋の外だけでなく中にいても、裸の〈わたし〉は、服を着ているように体を着ている。サラの作品は、着ることと脱ぐことが日々繰り返されて止むことのない、孤独な一個の身体の戦いを言葉を介さずに物語っている。

さて、不安な体を残したまま、先へ進もう。次に紹介するのは、イギリス人のファッション・イラストレーター、ルーズ・ハリソン Louise Harrison の《悪態をつく、らしからぬ動物 Inappropriate Animal with Bad Behaviour》（2011）と題されたシリーズ作品。動物たちは、人間離れならぬ動物離れした抜群のプロポーションを持ち、肉体的に魅力的でファッションナブルである。これを単純に人間を誇張的に表現するレトリック、アレゴリーと処理するわけにはいかない。銃を持ち煙草をくわえ、時計を身につけて魅惑的な脚線美を持つウサギ（らしき動物）は、ドット柄のドレスとタイツ、白と黒のコンビのショートブーツと真っ赤なアームグローブを身につけ、活動的にしてドレスアップされたファッションに仕上がっている（Fig. 3）。動物のウサギを思えば耳は短めで、ウェストはくびれて女性的な表現力に満ち溢れた「体」である。人間よりも人間離れしたスーパーボディを持つ動

物たちは決してここでは飼いならされない。真っ赤なタイツにグリーンのピンヒールを履いた挑発的なポーズの馬、全身網タイツのゴリラは焰をかかげながら吠えている。人間的なバランスを獲得した長身のキリンは、一戦交えた後なのか、血糊のついた剣を手に一服ふかしている (Fig. 4)。

ジャック・デリダは著書『われ動物なる故に我あり The Animal That Therefore I Am』で、「動物は裸だから、裸になるということがあり得ない、人間という例外をのぞいて、原則として動物は服を着るという発想を持ちえない」(註 2) と述べて、人が服を着る動物であることの妥当性に迫っている。衣服は、「人として適切 proper なこと」=「(人の) 所有物 property」だと定義する。ルーズが描く動物たちに視線を戻せば、ウサギという動物に特徴的な丸い尻尾はアクセサリー・ファーのような効果的な役割を担っており、キリンという動物が持ち合わせている特有のカラダの色柄は美しいデザインとして一枚の衣装を纏っているようにも見える。人と違って、動物は裸になるということがない=(つまり) 脱がないのだ。ルーズの作品は人としてデフォルメされた動物ではあっても、人によって支配されていない=飼いならされていない、他者(人間)との関係性を、衣装やファッションを通して表現していることが新しい。根源的な問題を投げかけてもいる。

最近ハンガリーとスウェーデンの研究者によって、シマウマのストライプいわゆるゼブラ柄についての興味深い実験が行われた。この絶妙ともいえるデザインが動物学的進化の過程で合理性を持っていることがその実験結果(註 3) によって明らかになった。黒と茶色のストライプや、ドット柄や単色などのヴァリエーションをシマウマのカラダに人工的に施すことによって試みられた。白と茶の間隔の狭いストライプだけは、白い部分が光を反射することにより、シマウマの天敵である吸血性の昆虫を寄せ付けなかった。これまでゼブラ柄の起源に対する説は様々あり、他の動物と区別して同種に仲間だとアピールするのに適している、温度調節に適している、あるいは白のストライプは進化の過程で変化していったもの、などがあげられる。人間のファッションにも用いられることが多い動物の持つ文様のひとつゼブラ柄は、シマウマにとっては他種の生物=(天敵である) 昆虫には魅力的なデザインではなく、つまりシマウマが生存するために理にかなった生物学的進化の結果として現れたものなのだ。

デリダは前掲書において、「I, the Animal」と定冠詞と単数形の大文字で表現することによって、人間は他のあらゆる生き物とは隔絶している「動物」であること(という考え)を主張する。また、これは文法的には動物一般を意味する用法でもあるが、私という「自己」を意識する言葉とともに用いることができ、「we, the animals」という言葉で表現される意味との差異を喚起させる(註 4)。動物は〈わたし〉を意識しない、「わたし」とは言わないの

だ。

ファッションは「人と違っていたい」「人と同じでありたい」という二つの相反する欲求が拮抗する〈わたし〉の表現の上に生まれる(註5)が、そこに「人は(だけが)衣服を着る動物である」というテーゼが潜んでいる。つまりシマウマのストライプは「他の動物と区別して同種に仲間だとアピールするためのデザインでもあったが、個あるいは私として突出するための衣装ではない。

飼いならされない＝人間と化した動物とその衣装が投げかけてくる問いを傍らに置きつつ、別の作家の作品に移ろう。フランス人のコミック作家、ダヴィッド・リシャール David Richard は《パンツの中のインクの汚れた嗜好》(Un Sale goût d'encre dans la culotte)(2012)と題されたドローイング集の中で「倒錯した身体」と呼べるような身体表現の病者を執拗に繰り返す。頭部／顔を描いた作品では、紙が植物のように伸びて、それは二本の脚になって、文字通り着地する。脚と呼べるとすればその伸びた枝の先に尖ったスニーカーが描かれているからである。両耳からは枝葉が伸び、その植物が成長を続けていることがわかり、一本の木然とした身体には多数の虫が這い、あるいは頭部半分がカットされその側面には樹齢が描かれる。

はにかんだような可愛らしい女の子の上半身を支える下半身は獣の獐猛な二本の足が毛で覆われている (Fig. 5)。同様の動物的下半身と人間的上半身のモチーフでは、いわゆる臍出しルックの女の子が読者に向けて自分を‘Sexy?’と問う。見開きの別頁には、セパレーツの衣装の臍部分だけが毛深く描かれた女の子が並ぶ。

動物と人間を分かるところはどこにあるのか。たとえば我々が毛皮のコートを防寒に着用するように動物は毛に覆われているのだろうか。獣毛は温度調節を担っている。メスへの求愛行為を目的として、動物ではオスの方に美しいからだを与えられる事例が多くみられ、また特徴的なダンス行為もよく知られているところだ。それらは、流行のファッションを身につけて、体を着飾り、脱毛し、顔に化粧を施す我々人間の装飾行為に相当する。そのような人の美容行為や装飾行為は、恥じらいから性器を隠す「羞恥心」と大きく関連しあっている。隠すことは着ることであり、守ることであり、見せる(魅せる)ことでもある。

人間以外の動物も、からだを隠したり見せたりして「着る」と表現できるとしても「脱ぐ」という行為を能動的に行うことはない。毛を剃ったり、ハサミでカットしたり、身体加工を施すことはない。ダヴィッドが描く女の子の髪は放っておけば永遠に伸び続ける植物の蔓のようである (Fig. 6)。仏教的な「いのち」の平等性をここで取り入れるならば、こ

の作品集のなかでは、人も動物も植物もみな同じ生き物として並列に描かれている。そして時には一個のからだ／いのちに別の種が混成している。人間は他の生物、動物や植物とどこがどう違うのだろうか？

デリダは、「獣と主権者 *Le bête et le souverain*」と題されたセミナーの中で、アリストテレスの唱えた「社会的動物」という概念を敷衍して、「政治的存在」としての人間の問題を、*bête* というフランス語独特の単語によって展開している（この言葉は、「獣」の意味を持つ名詞としてだけでなく、英語にはない「愚かさ」という形容詞としても使われる。*La* という女性名詞に付く定冠詞をとまう「獣」と、*le* という男性名詞に付く定冠詞をとまなった「主権者」との間にあるのが、法のもと政治的社会に生きている生来の「人間」であり、獣と主権者は極の位置にありながら似通った性質を持つ存在でもある。この二つは法外の、あるいは法からは遠く離れた非政治的存在だというスキームを提示する（註6）。ダヴィッドの描く少女の髪を再び思い出そう。それはいつまでも伸び続け、やがて地面と繋がって一つになっていることを想像する。ヒエラルキーのない社会にはタブーや法的規制もないが、ハサミを入れて軽快さをデザインしたり、流行という刹那的な時間を享受するファッション性は存在しない。色っぽいかを問われて、何と答えるべきか？動物としてのわたしか、人間としてのわたしか、女か、男か、どのような立場の〈わたし〉で反応しよう？

我々は動物である。けれども他の動物とは違っているということを「人間は服を着る動物」として説明できないか再び考えてみたい。本稿で紹介する最後のコミック作家ドイツ人のアイシャ・フランツ Aisha Franz には、一匹の犬が繰り広げるハードボイルドタッチのシリーズ作品がある。動物が主人公で人間社会に入り込んで活躍するストーリーは、ドイツや日本に限らず世界共通のフィクションの古典的手法ともいえるが、ここで紹介する『ブリジット Brigitte #2』（2011）を見る限りは、かなり深く重いヒューマンドラマが展開されており、なぜブリジットは動物でなければならないのかを作者に問うてみたくなる。ブリジットが不妊手術を嫌々受けさせられるシーンの回想から本編は始まる。「真珠商人 *The Pearl Merchant*」と題された二つ目の挿話から、舞台は病院のベッドから常夏の島ハワイへ移り、スピード感のある復讐劇が繰り広げられる。ブリジットは、ワンピースに帽子とウィッグを身につけ、口紅と睫毛が印象的な濃い化粧を施し、妊婦になりすましてハワイへ入国する。偽造パスポートの名前は、変装アーティストと同名の「シンディ・シャーマン *Cindy Sherman*」であるというユーモアに読者は気付くだろう。

タクシーから降りると、「もうこんな恰好でやってられないわ」と腹部に詰めたクッションをはぎ取り、ウィッグを大胆に脱ぎすてる（Fig. 7）。ハワイ島でしか採取できない幻の黒真珠マルガリータをめぐる闇の取引が行われている。人間を好きにならない薬を飲み、

全身黒タイツを着用し、身を隠す。復讐相手イワンに銃口を向け、発砲のタイミングを狙うべく引き金を引いたとき、イワンの妻で現地ハワイアン女性のお腹に思わず目をやるのだ。彼女は妊娠している。ブリジットにとってはもはや叶わぬ夢ながらも、銃を置いて、自分の妊婦姿を想像せずにはおられない。そのときタイツで隠しきれなかった尻尾で滑って、床へと転げ落ちてしまう (Fig. 8)。復讐には失敗したが、「人道」的には失敗しなかったブリジット。

デリダは前掲書で、17 世紀の詩人ラ・フォンテーヌの「最強者の理由が最善のものとなる それはすぐに明らかにされる」(『寓話』より) という言葉をたびたび引用する。「主権者がそれを正しいというとき、否応なく力によってそれが勝利となる」ことはフランス人なら誰もが学校で習い知っている教訓であると言う。悲しい運命を生きる犬ブリジットは、人間によって否応なく生殖能力を奪われ、それゆえに服を身につけ、目的のために時には変装をし、服を脱ぎ、また身を隠す。人という動物を身に着けることが、生きる術の動物(=犬)なのだ。デリダは政治的存在からかけ離れた人間に「愚かさ」を見出し、またそれは「生来的」だと付け加える。この形容詞は人間以外の動物には使われることはない(註7)。

人間にとって(人間以外の)動物は、実験材料となり、支配下におかれ、労働力や家畜ともなる。人と動物の間には非対称性が存在している。通りを歩けば、人間の子供服のような洒落た衣装で飼い主と散歩する犬を見ることは珍しいことではない。動物が家族の一員、つまり人間化している現実もいなめない。しかしそれを幸福で平等な関係とも言い切れない。犬は自分自身でそれを選び、「おしゃれ」したいという意志のもと、人間に変身しているとは好意的に解釈したとしてもそうは思えない。

わたしたちは「人を着ているとは言えないだろうか」。人を身につけて生きる運命を背負うアイシャの描く犬、半身動物半身人間の生き物を描き続けるダヴィッド、人間離れした身体を持つルーズのファッショナブルでセクシーな動物たち、そして人という体を脱いで壁に掛けてまた手を伸ばして人を着たり脱いだりする日常の戦いを描くサラの服(その「人」は女か男かも不明)……。わたしたちは自らのなかの動物性をもてあまし、身の置き場がなく、不安な現実の前に映る体を突きつけられている。

最後に、美術史を遡ってヌードと裸体の問題に取り組んだ著書『Ways of Seeing』(1972)で知られるジョン・バージャーの「猿の劇場 Ape Theatre」と題されたエッセイ(註8)と、ホモセクシャルの罪で投獄された小説家オスカー・ワイルドが出所してすぐ友人に書いた手紙(註9)を紹介して、本稿を閉じよう。

バージャーは子供の頃から動物園に行くのが楽しみで、とりわけオランウータンやチンパンジーなど類人猿を見るのが好きだった。彼にとっては劇場で芝居を見ているような感覚であり、猿たちにとってはバージャーら人間が観衆なのではないだろうかと問う。バージャーは進化論の過程を紐解くような発見を動物園で見いだす。生まれるということは分かたれるということであり、その信じがたく受け入れがたい別離を受け入れるとき、想像力が生まれる。オランウータンが赤ちゃんの頭を自分の胸に強く押し付けた。バージャーはその動物から人間という動物を見た。想像力は分かたれたものを懸命に結びつけようとする。

ワイルドは、19 世紀ロンドンの上流社会を風刺的に描いた喜劇『理想の結婚 An Ideal Husband』（1989）の中で、「ファッションは着る人を物語ります、また他の人の着ているものがファッショナブルではないということも示すのです」（註 10）と、自らのファッション論を登場人物に語らせている。ファッションは一時的に絶対的な価値しかもたず、時と場所によって変化する「現在」を表現する現象である。この小説を出版した人物スミザーズ Smithers を、ワイルドは手紙の中で描写するが、そのとき人物像よりも彼の風貌をこと細かに説明しているのが興味深い。「大きな麦わら帽をかぶり青いタイを繊細な感じでダイヤモンド・ブローチで留めているが、そのブローチは濁った水かワインのような色だ。きれいに髭を剃った顔は祭壇に仕える牧師のようだが、血色が悪く彼が仕えている神とは文学である。その悩みは詩そのものが理由ではなく出版社を探す詩人たちによるものである」。性格描写はといえば「彼と一緒にいることは喜びである、とても親切な男だ」の一行。

同じ頃、女流小説家エイダ・リーヴァーソン Ada Levenson に宛てた手紙では、二年間にわたる闇のような獄中生活の最中に彼女の素晴らしさを思い出さない日はなかったこと、出所後すぐ彼女に再会できた喜びを詩のように綴っている。彼女の美しさは月を見守るようなスフィンクスだと讃え、その名でもって彼女に呼びかける。「美しいものはいつだって美しい」——その一行とともに。神話のなかのスフィンクスは、からだはどっしりとしたライオンのそれであり、鳥の翼を持ち、女性の顔をしているけれども、エジプトでは男性と知られている。

〈註〉

1. Barthes, Roland. *The Language of Fashion*, Berg, 2006 [2004], p.98. Translated by Andy Stafford, Edited by Andy Stafford and Michael Carther.
2. Derrida, Jacques. *The Animal That Therefore I Am*, Fordham University Press, 2008 [2006], p.5. Translated by David Wills, Edited by Marie-Louise Mallet.
3. Reported by Gill, Victoria, 'Zebra stripes evolved to keep biting flies at bay,' BBC Nature, 9 February, 2012.

<http://www.bbc.co.uk/nature/16944753>

4. Derrida, Jacques. *Op. cit.*, pp.29-35.
5. 拙著『闘う衣服』（水声社 2011年 17-37頁）の序論「人は服を着る動物である」を参照。ファッションは唯一無二の個としての表現と共同体の一員としての表現が拮抗して〈わたし〉をめぐる現象する。
6. Derrida, Jacques. *The Beast & the Sovereign Volume 1*, The University of Chicago Press, 2011 [2008], pp.25-26. Translated by Geoffrey Bennington, Edited by Michel Lisse, Marie-Louise Mallet, and Ginette Michaud.
7. *Ibid.*, p.68.
8. Berger, John. *Why Look at Animals?*, Penguin Books, 2009. pp.38-53
9. Proyer, Felix, ed. *The Faber Book of LETTERS*, Faber and Farber. pp.217-218.
10. Wilde, Oscar, *An Ideal Husband*, The Hokuseido Press, 1985 [1913], p.75.

〈図版〉

Fig. 1, 2 サラ・クレップのコミック作品『閉ざされた部屋』（2010）からの一場面

Pages from Sarah Kläpp's comic work, *The Shut Room*, (2010).

Fig. 3, 4 ルーズ・ハリソン 《悪態をつく、らしからぬ動物》 2011年

Louise Harrison, *Inappropriate Animal with Bad Behaviour*, 2011.

Fig. 5, 6 ダヴィッド・リシャール 《パンツの中のインクの汚れた嗜好》シリーズ 2012年

David Richard, *Un sale goût d'encre dans la culotte*, 2012.

Fig. 7, 8 アイシャ・フランツのコミック作品『ブリジット #2』（2011）からの一場面

Pages from Aisha Franz's comic work, *Brigitte #2*, (2011).

小野原教子（おのはらのりこ）

大阪市に生まれる。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了、博士（人間・環境学）。旭化成繊維マーケティング部勤務、ロンドン大学名誉研究員、ヴィクトリア&アルバート美術館客員研究員を経て、兵庫県立大学経営学部准教授、神戸芸術工科大学デザイン学部非常勤講師。主な著書に単著『闘う衣服』（水声社、2011年）がある。

（※肩書きは掲載時のものです）